

「生誕100年 笠木實と没後30年 友人、清宮質文」は、昨年生誕100年を迎え、2018年逝去した桐生市出身の画家、笠木實（かさぎ・みのる 1920-2018）と東京美術学校（現・東京藝術大学美術学部）同級生の友人で、今年没後30年を迎える清宮質文（せいみや・なおぶみ 1917-1991）を、アーツ前橋、群馬県立近代美術館、公益財団法人 大川美術館、高崎市美術館の収蔵作品でご紹介する展覧会です。今回は笠木と清宮の「めざめとゆめ」について解説します。

## ① 二人のあこがれ

東京美術学校をめざし画塾、同舟舎どうしゅうしゃ絵画研究所で出会った1935年、笠木實は15歳、清宮質文は18歳。1937年春、高麗神社への合格御礼参りも二人で出かけました。画家で教育者の父、清宮彬ひとしが蒐集した西洋絵画カラー複製目当ての学友たちと、清宮家で夢を語る夜更けもありました。しかし現実には戦争の時代。1941年12月、笠木は繰り上げ卒業、清宮は卒業制作が間に合わず翌年3月卒業し、のち国内で兵役に就きます。清宮は聖書と万葉集を携え入営しました。

## ② 二人のめざめ

戦地から還らぬ友の分までと、1950年代からともに画業に専念して春陽会に出品。17歳の頃「レオナルド・ダ・ヴィンチのいい画集があったんです。ちょうどクロッキーを見ていたときなんですけど、その線の中に無限感を感じた」清宮が、その線を求めて悩む一方、同じ10代で銅版画を始め、清宮が羨むほどの素描力だった笠木は、春陽会の同郷の師「南城一夫先生にお目にかかって「君は白黒でエッチングなら描けるけれど、色が使えないからエッチングはやめなさい」って云われました」。今日、清宮は木版画家として、笠木は日本銅版画草分けの作家として知られますが、ともに油彩や水彩、ガラス絵などに挑み、少年時代、銅版画《のぶ》が雑誌表紙を飾るほどだった笠木に、清宮は銅版試作を見てもらい、笠木は個展出品作を清宮に見てもらおうなど助言しあい、清宮の書簡に「シンユウ！ヨロシクタクノム」の文字も踊る仲間でした。やがて清宮は木版やガラス絵に、笠木は油彩に力を注ぐようになります。笠木は師、南城一夫や岡鹿之助から、巧みすぎる素描力を「壊す」ところから指導されます。《木馬館》から《風船を売る男》を見渡すと、岡や南城を思わせるタッチや色使いが感じられます。巧みなイメージを捨て、タッチや色に心を配りながら、自分の絵を探す途上でしょう。岡に助言をもらい笠木がパリに渡った1962年、清宮もフランスへの希望を募らせませんが実りませんでした。

## ③ 二人のゆめ

在学中から線を一本引くのさえためらった清宮は、フランスに渡らず木版を刻み続け、水彩で和紙に丁寧に摺り重ねながら、心の風景や思い出だけを静かに結晶させます。そして最晩年のガラス絵でも静かに心象や記憶を透かして、彼方より届く光をみつめようとしてきました。「自由にさまよい歩ける精神的な世界が欲しい。私は、私の限りなく深く澄んだ空気を自分の絵の中に求めているのですが—ただそれだけを求めているのですが—」と記す、画家というより詩人の情から絵画空間の奥深くへ、彼方へさまよいイメージを手探るうち、「実在」と呼ぶリアリティに筆先が触れたのです。笠木もまた難病から体の自由を失ったのち、ふるえる筆を布巾に持ちかえても、描きたい一心を込めました。もともとアウトドア派で、スキーも釣りも玄人はだしの笠木も、遠出は望めなくなり、近所の玉川上水沿いの遊歩道が主題となりました。《雨あがる遊歩道（みち）》の水たまりには、溪流の反射を見極めながら獲物と渡り合うことで培われた細やかで鋭いまなざしを感じます。《散歩道》にも登場する後ろ姿と犬は、通りすがりの犬の散歩を描いており、犬を飼っていなかった笠木の自画像ではないそうです。しかしずっと犬を飼いたがっていたという逸話もあり、やはり夢としての自画像ではないでしょうか。最期の作で未完の《木立》には人影もありません。少し寂しいですが、暗い印象はなく、どこか澄み渡る明るい心境に安堵します。木立や水辺など、清宮と同じく身近な風景や思い出だけを辿る最晩年作は、絵の向こう側へ、まるで1991年に逝った清宮の待つ、彼方への奥行きを深め、浄らかな光に満たされています。「柳にとびつく蛙のように、落ちてても落ちててもとびぬく根性が、言葉をかえれば才能なのかもしれない」と語った笠木。巧みすぎる素描力が、絵と向き合うまわり道を強いたのではないのでしょうか。「無能無才にして、只此一筋道に繋がって了った」清宮に対し、多才な趣味人だった笠木は最晩年「できないことはないが、一番できないのは絵だ」と漏らしたそうです。腕より心から絵と向き合う晩年を祝福せずにはいられません。同級生二人ながら、それぞれに孤独な道の果てに待っていた最晩年の光と、二人の心温まる10代からの交友を偲びたいと思います。

「生誕 100 年 笠木實と没後 30 年 友人、清宮質文」

展示室のご案内

3階

第 5 展示室



笠木實 《OUI と NON》  
アーツ前橋蔵



笠木實 《のぶ》  
群馬県立近代美術館蔵

清宮質文 《夜》《冬の窓》  
(公財)大川美術館蔵



笠木實 《木立 (未完)》《散歩道》《雨あがる遊歩道 (みち)》

